共感”復活への挑戦ー里山“野上がり”会ー

（特非）シビル NPO 連携プラットフォーム
理事　大田　弘

“野上がり”と云う農村行事をご存知だろうか？田植えと収穫を終えた春と秋の二回、村人全員が休みを取り、つまり野から上がり、お互いを慰労し、また神に感謝の気持ちを奉げる行事である。かつての農作業は共同が前提だったので、それぞれの集落でほとんどの人々が参加していたが、共同社会の成り立ち方が“集”から“個”に重心軸が大きく移動し、野上がりのことを知っている世代は少なくなった。

私の故郷（富山県黒部市宇奈月町明日）は集落の限界化が進行している。祭りの神輿の担ぎ手が減少し、かつての華やかさはみられない。集落の共有財産・生活の糧であった入会山（林）はその役割を終え、手入れが行き届かず、猿や猪などの近隣者との境界線（縄張り）が曖昧になり“獣害”が発生している。また、著しい高齢化の進行と“共同社会”の必然性が希薄になった結果、元気なお年寄りの引きこもり現象を加速させている。この状況に一石を投じようと、今年４月「愛本ひばり野交流会」（http://aihibarino.jimdo.com/）が結成された。地元で行われてきた様々な行事を共同共感の場として復活させ、限界集落の潜在力を引き出し、都市部との交流もセットにして活性化する試みである。運営の中心は 60 歳を超えた熟年世代である。

その活動の一つが村の旧家・農村文化伝承館での“野上り会”復活である。食事の提供だけでなく、干し柿作り体験、手作り作品展示や囲炉裏を囲んだ歴史談義などメニューはかつてとは異なるが、里山に笑い声が響き渡る貴重な時空が訪れる。

私も今秋、囲炉裏談義のホストとして参加し、この数年間で聞きかじった村の歴史を語った。都市部からの訪問者には、この集落と都市部との歴史的関わりについての話をする。多くの方は「そんなことがあったのですか！」と驚き「勉強になりました」と云ってお帰りなる。が、私は「共同」の大切さを過去から学び、これからの社会の在り様を考えるきっかけになればと密かに期待している。

「資本主義」（自由競争）を提唱したアダム・スミスは人間には利己心と同時に相手のことを慮る利他心（共感）を持ち合わせていると云う。活動は始まったばかりで「そんなことをしても一銭の得にもならない」という冷ややかな囁きも聞こえてくるが、野上り会が終わる頃に 30 代の青年が訪ねて来て「会には参加できませんでしたが、後片付けを手伝います」と云った。言いようもないホッとした空気が流れた。